

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 22 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2021

課題番号：16K03111

研究課題名(和文) クルトウラの挑戦 20世紀後半の在外ポーランド・メディアの歴史的意義

研究課題名(英文) Challenge of Kultura: historical significance of the Polish media in exile

研究代表者

小山 哲 (Koyama, Satoshi)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：80215425

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：20世紀後半、ポーランドの知識人の言論活動は、「国内」と「在外」の2つの陣営に分かれて展開された。このうち「亡命」側で大きな役割を果たした拠点の1つが、文学研究所であり、雑誌『クルトウラ』であった。「国内」と「在外」のあいだには冷戦期に特有のイデオロギー的な対立が存在したが、『クルトウラ』は、自由主義陣営の言論の場としての性格を堅持しながら、さまざまなかたちで「国内」の知識人との関係を構築し、東西の言論の分断を乗り越える方法を模索した。本研究では、文学研究所と『クルトウラ』の歴史的役割を解明するために不可欠な基礎的史料(とくに編集長ギェドロイツの書簡)を収集し、内容を分析する作業を行なった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『クルトウラ』は、20世紀後半を代表するポーランドの作家たちの発表の媒体となっただけでなく、冷戦終結への道筋を準備するさまざまな構想が生まれ出された舞台ともなった。編集長ギェドロイツの関連資料を調査するなかで、『クルトウラ』の執筆者の1人であるヤヌシュ・モンドリイとの往復書簡を発見した。モンドリイは日本学を学んでおり、ギェドロイツへの書簡のなかで日本の「連帯」支援運動の動向を伝えている。現在、この往復書簡の整理と翻訳を進めている。

研究成果の概要(英文)：In the second half of the 20th century Polish intellectuals were divided into two camps, "kraj" and "emigracja". One of the bases that played a major role on the "emigracja" side was the Institute of Literature and the magazine "Kultura". Although there was an ideological conflict peculiar to the Cold War period between "kraj" and "emigracja", "Kultura" sought a way to overcome the division of eastern and western camps by building relationships with intellectuals from "kraj", while it maintained its character as a free press for the liberal camp. In this study, we collected and analyzed the basic historical materials (especially the correspondence of the editor-in-chief Giedroyc) that are indispensable for making clear the historical role of the Institute of Literature and "Kultura".

研究分野：ヨーロッパ史、ポーランド史

キーワード：クルトウラ 文学研究所 ギェドロイツ 在外ポーランド・メディア

1. 研究開始当初の背景

20世紀後半の東欧では、冷戦下の政治的分断のもとで、言論活動もまた「国内」と「在外」の2つの領域に分割されていた。ポーランドの場合、1947年にローマで設立され、その後パリに移転した「文学研究所」が「在外」の言論を担う重要な拠点の1つとなった。文学研究所が発行する月刊誌『クルトゥラ(文化)』は、検閲で規制された「国内」のメディアでは発表できない言説をポーランド語で掲載する媒体として、ポーランド国内の民主化を側面から支えただけでなく、ポーランドと周辺諸国との関係について新たな視角から考察し議論する舞台となり、冷戦終結後への展望を切り拓くうえでも重要な役割を演じた。

研究開始時には、『クルトゥラ』編集部の関連史料の編纂・刊行がポーランドで始まっていたが、編集長イェジ・ギェドロイツと雑誌の執筆者・関係者との往復書簡については、その多くが未刊行であった。日本では、『クルトゥラ』に執筆した文学者(ヴィトルト・ゴンプロヴィチ、チェスワフ・ミウォシュら)の作品の一部が翻訳されていたが、彼らの文学活動の舞台となった「文学研究所」と『クルトゥラ』を対象とする研究は行なわれておらず、冷戦期のポーランドの「在外」メディアの役割、言論空間における「国内」と「在外」の関係についても先行研究が存在しない状態であった。

2. 研究の目的

研究開始時には、とりわけ1970年代前半までの『クルトゥラ』の内容と、編集に関与した人物・集団の分析をとおしてポーランドの「在外」メディアが担った機能を検討し、冷戦期ヨーロッパの言論空間の構造の解明に寄与することを目的として調査に着手した。しかし、2017年3月に「文学研究所」で資料調査を行なったさい、日本との関係にかかわる史料(ヤヌシュ・モンドリィとギェドロイツの往復書簡)が存在することがわかり、1980年代のポーランドにおける「連帯」の運動、日本の支援グループ、パリの「文学研究所」の三者の関係の解明についても、併せて研究の目的とする方針に変更した。

3. 研究の方法

(1)「文学研究所」と『クルトゥラ』にかんする研究状況の調査

「1. 研究開始当初の背景」で述べたように、日本での先行研究はほぼ存在しない状況であり、ポーランドにおける研究動向を把握することが中心となった。2000年代に入ってヤヌシュ・コレク、イヴォナ・ホフマン、アンジェイ・スタニスワフ・コヴァルチクによる本格的な研究の成果が発表されており、冷戦期の国際関係の変化を背景とする「文学研究所」の活動の推移を概観できることが判明した。とくに本研究が企画される直前に刊行されたコヴァルチクの浩瀚な研究書『政治への情熱 ギェドロイツとミェロシェフスキについて』(2巻、ワルシャワ、2014年刊)は、『クルトゥラ』誌上で展開された冷戦期の国際情勢の分析とヨーロッパの将来に向けての構想がどのように生み出されたかを詳細にわたって記述しており、本研究にとって重要な先行研究の1つとなった。

他方で、『クルトゥラ』にかかわった人びと(編集長イェジ・ギェドロイツ、編集部のゾフィア、ジグムント・ヘルツ夫妻、重要な執筆者であったチェスワフ・ミウォシュ、ヴィトルト・ゴンプロヴィチ、グスタフ・ヘルリング=グルジンスキ、ユゼフ・チャプスキ、ユリウシュ・ミェロシェフスキ、イェジ・ステムポフスキ、コンスタンティ・イエレンスキ、アンジェイ・ポブコフスキ、スタニスワフ・ヴィンツェンスら)にかんする個別の研究が2000年代以降にポーランドで急速に進み、「文学研究所」を中心とする言論人の星雲上のネットワークの具体的な様相があきらかにされつつある。とくにギェドロイツについては、マグダレナ・グロホフスカによる伝記(ワルシャワ、2009年刊)に加えて、これまで十分に知られていなかった戦前期の雑誌編集者としての活動に焦点を定めたマレク・ジェブロフスキ『イェジ・ギェドロイツ 『クルトゥラ』以前の生涯』(クラクフ、2012年刊)が刊行されたことにより、第二次世界大戦の前後で「文学研究所」の創始者ギェドロイツの思想と行動は一貫していたのか、変化したとすればそれはどのような変化であったのか、という新たな問題が浮上することになった。

研究開始時に研究代表者が重要性を認識できていなかった問題として、「文学研究所」から刊行されたもう1つの雑誌『歴史ノート』(Zeszyty Historyczne, 1962~2010年にかけて刊行)の存在がある。冷戦期の言論空間の東西陣営への分断は歴史学・歴史認識の領域にも及んでおり、『歴史ノート』は「在外」側の歴史学の専門誌として編集・刊行された。掲載された内容は現代史にかかわる論考と史料に大きく比重が傾いていたが、これは、「国内」で政治的な制約から研究・公刊ができない状況をふまえて、意図的に採用された編集方針であったと思われる。冷戦期

のポーランドの歴史研究についてはこれまで、「国内」における「開かれたマルクス主義史学」とフランスの「アナル学派」との関係に関心が向けられ、本研究の代表者もかつてそのような関心から研究を発表したことがあるが、「在外」の研究動向は史学史的視野の外におかれていた。今後は、「国内」と「在外」の双方の動向を視野に入れながら、歴史研究の領域における分断の構造と、それにもかかわらず壁を越えて行なわれた研究者間の交流の具体像をあきらかにすることが必要であろう。2019年に刊行されたギェドロイツと「国内」・「在外」の歴史家たちとの書簡集（3巻、ウッチ・パリ刊）は、歴史研究の領域における「国内」と「在外」をつなぐ結節点として「文学研究所」を位置づける手がかりとなるであろう。

（2）刊行史料の収集と内容の検討

研究実施期間中に、「文学研究所」にかかわる基礎的な史料の刊行が急速に進んだ。主要なものは、以下のように分類することができる。

編集長ギェドロイツと『クルトゥラ』執筆者との往復書簡。その根幹となるのは「クルトゥラ文庫」(Archiwum KULTURY)のシリーズである。このシリーズの第1巻は作家ゴンプロヴィチとの1950～1969年の文通、第2巻はクシシュトフ・ポミアンによるインタヴューをもとにしたギェドロイツの自伝『四手による自伝』を収めたもので、それぞれ1993年と1996年にワルシャワの「チテルニク」社より刊行されている。

その後、ゴンプロヴィチとの文通が補充され（1巻）ミウオシュとの文通（3巻）、ミエロシェフスキとの文通（5巻）、ステムポフスキとの文通（2巻）、テオドル・パルニツキとの文通（2巻）のほか、イエレンスキ、ポブコフスキ、メルヒオル・ヴァンコヴィチ、イエヴヘン・マウニウク、ヤン・ユゼフ・リプスキ、レシエク・コワコフスキ、ヴィトルト・イエドリツキ、ユゼフ・ヴィトリン、チェスワフ・ストラシェヴィチ、ヴァツワフ・A・ズビシェフスキ、ステファン・キシレフスキ、ヴィンツェンス、ユゼフ・ウォポドフスキとの文通、ウクライナ系知識人との文通（各1巻）が刊行された（出版社は2012年まで「チテルニク」社、2014年以降は「文学研究所協会」「クルトゥラ」が編集に協力し、「アダム・ミツキエヴィチ記念文学博物館」と「ヴィエンシ（絆）」が発行元となっている）。

このシリーズ以外に、管見のかぎりでは、ヤン・ノヴァク=イエジョランスキ、アレクサンデル・ヤンタ=ポウチンスキ、ズビグニェフ・S・シエマシコ、ミハウ・ソコルニツキ、ヴィクトル・ヴォロシルスキ、レオポルト・ウンゲルとギェドロイツとの文通が個別に刊行されている。さらに重要な史料として、ギェドロイツと並んで『クルトゥラ』の編集に深く関わったヘルリング=グルジンスキとギェドロイツとの往復書簡が、ヘルリング=グルジンスキの著作集の一部として刊行された（3巻、2018年、クラクフ刊）。「国内」・「在外」の歴史家たちとの文通の一部が公開されたことは、上記3.（1）で述べたとおりである。

『クルトゥラ』に執筆した著述家たちの著作集やアンソロジー。『クルトゥラ』に掲載された論考については、シリーズ「パリ『クルトゥラ』の周辺」として、執筆者やテーマごとに編集されたものが継続刊行されている（現時点で22巻が既刊、発行元は文学研究所「クルトゥラ」と書籍研究所、パリ・クラクフ刊）。著述家ごとの文集や著作集の刊行も多数にのぼっており、その1つ1つについてここで言及することはできないが、特記すべきは、きわめて詳細な註解を付したヘルリング=グルジンスキの新しい著作集（全15巻）が2021年に完結したことである。ギェドロイツとともに『クルトゥラ』の編集にたずさわりながら、体制転換後はギェドロイツと政治的に対立し「文学研究所」と袂を分かったこの作家の著作の全体像があきらかになったことは、「文学研究所」の研究にとっても大きな意味をもっている。

以上のような関連資料の刊行の分量と速度は研究開始時の想定をはるかに超えるものであり、研究を進めるうえでの便宜が大幅に向上した一方、その質と量には研究代表者の情報処理能力を上回るものがあり、研究動向の把握と刊行史料の精査に予想以上の時間を費やす原因となった。

（3）「文学研究所」（パリ）とポーランドの図書館（ワルシャワ）における実地調査

2017年3月に『クルトゥラ』の発行元であった文学研究所（パリ北西郊外メゾン・ラフィット）を訪問して資料の調査を行なったのち、ワルシャワ国立図書館で関連する研究文献を調査した。パリでの調査中に、文学研究所所長ヴォイチェフ・シコラ氏より、『クルトゥラ』の執筆者の1人であるヤヌシュ・モンドリイが、日本の情報を「文学研究所」に伝えていたことを教示された。モンドリイは大学で日本学を学んだ経歴があり、日本の商社（日商岩井）のヨーロッパ駐在員として勤務するかたわら、『クルトゥラ』に日本関連の記事を寄稿していた。また、編集長ギェドロイツとの往復書簡が「文学研究所」のアーカイヴに残されている。2017年3月の調査中に、1981年から2000年にかけて両者間で交わされた書簡を含むモンドリイ関連ファイルを開覧することができた。

この往復書簡については、本研究の計画時点では存在を認識しておらず、したがって当初作成した研究計画では、この史料の調査・分析は課題に含まれていなかった。しかし、この調査から、

モンドリイ関連資料が、「連帯」活動期からポスト社会主義期にいたる時期の日本と文学研究所との関係史にかかわる貴重な史料群であることが明らかとなった。この点を考慮して、研究計画を一部変更し、書簡の情報を整理する作業を、本研究の枠内に組み込むこととした。

モンドリイ・ギェドロイツ往復書簡については、ほぼ白紙の状態からの研究となり、書簡が書かれた1980年代以降のポーランドと日本の状況をふまえて1つ1つの書簡を読み解くのに時間を要しているが、その後の調査によって日本側の「連帯」支援グループであった「ポーランド資料センター」とのつながりが判明したことから、研究の方向について1つの手がかりが得られたと考えている。ポーランド語原文と日本語対訳・注釈を付した資料集を編纂することを予定している。

(4) コロナ禍による制約のもとでの研究の継続

2019年5月末に研究代表者に病変が見つかり、6月から年度末まで治療のために休職せざるをえなくなった。この間、研究活動を中止せざるをえず、研究実施計画を2020年度に延長する申請を行なった。2020年度の後半から徐々に研究活動を再開したが、治療の継続にともなう健康上の条件に加えてコロナ禍による制約も重なり、海外・国内を問わず遠方での調査ができなくなった。ただ、研究開始時と大きく異なるのは、「文学研究所」のウェブサイトがインターネット上で開設され、かなり多くの情報にアクセスできることである。『クルトゥラ』と『歴史ノート』の現物は京都大学文学研究科の図書館に所蔵されており、すでに収集した刊行物、未刊行史料の写真版を合わせて参照することによって、研究を継続することが可能となった。

4. 研究成果

2016年8月にリトアニア歴史研究所において報告“*The multi-confessional Commonwealth: a reconsideration on the coexistence of different religious groups in the Early Modern Poland-Lithuania*”を行なった。近世史上の問題をとりあげたものだが、本研究の課題にアプローチするための前提となる歴史認識上の枠組みにかかわるものである。その後、冷戦期の「国内」と「在外」の分断と相互関係をふまえてポーランドにおける「共和政・共和主義」をめぐる言論を整理し直した。その結果をふまえて、2019年4月にソウルの西岸大学校(Sogang University)で開催されたセミナーで、“*Vicissitudes of the “Noble Republicanism” in contemporary Poland*”と題するレクチャーを行なった。近世の貴族共和政の記憶が、現代のポーランドにおいて、どのように(再)構築・(再)創造されているかを論じたものだが、パリの文学研究所と『クルトゥラ』は、独自の立場からそのような(再)構築・(再)創造を行ってきた重要な拠点の1つである。韓国では近年、「共和政」の理念とあり方をめぐって活発な議論が展開されており、セミナーでは、そのような背景をふまえて、ポーランドと韓国の状況、また、ヨーロッパと東アジアの状況を比較する観点から活発な議論が行なわれ、グローバル・ヒストリーの文脈に「文学研究所」の存在を位置づけるための多くの示唆をえた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小山 哲	4. 巻 -
2. 論文標題 ビヤスト朝からヤギェウォ朝へ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 渡辺克義編『ポーランドの歴史を知るための55章』明石書店	6. 最初と最後の頁 53, 57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小山 哲	4. 巻 -
2. 論文標題 「ひろば」としての記憶の場 ドイツとポーランドの歴史家たちの挑戦	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都日独協会報	6. 最初と最後の頁 2, 3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小山 哲	4. 巻 40
2. 論文標題 多宗派の共和国 近世ポーランド・リトアニア共和国における諸宗派共存体制とその変容	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東欧史研究	6. 最初と最後の頁 109-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小山 哲	4. 巻 260
2. 論文標題 17世紀危機論争と日本の「西洋史学」	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『西洋史学』	6. 最初と最後の頁 84-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小山 哲	4. 巻 -
2. 論文標題 複合国家のメンテナンス 17世紀のリトアニア貴族の日記にみるポーランド=リトアニア合同	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 古谷大輔・近藤和彦編『礫岩のようなヨーロッパ』山川出版社	6. 最初と最後の頁 272-191
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小山 哲	4. 巻 77-1
2. 論文標題 「史学史」の線を引き直す ヒストリオグラフィにおける「近代」をどう捉えるか	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『史苑』	6. 最初と最後の頁 96-107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 2件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Satoshi Koyama
2. 発表標題 Vicissitudes of the “Noble Republicanism” in Contemporary Poland
3. 学会等名 CGSI Weekly Colloquium, Sogang University (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小山 哲
2. 発表標題 多宗派の共和国 近世ポーランド・リトアニア共和国における諸宗派共存体制とその変容
3. 学会等名 東欧史研究会2017年度大会 (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Satoshi Koyama
2. 発表標題 The Image of the Polish-Lithuanian Commonwealth from the Perspective of Japanese Historiography
3. 学会等名 The Third Congress of International Researchers of Polish History, The Jagiellonian University, Krakow (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Satoshi Koyama
2. 発表標題 The multi-confessional Commonwealth: a reconsideration on the coexistence of different religious groups in the Early Modern Poland-Lithuania
3. 学会等名 Summer International Symposium 2016 in Vilnius "Entangled interactions between religions and national identities in the space of the former Polish-Lithuanian Commonwealth" (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関